

宮崎県の生活綴方教師・木村寿 (四)

—— 文集『光』における「調べる綴方」の展開 ——

菅 邦 男

一、「調べる綴方」の始動

1、「調べる綴方」と「調べた綴方」

木村寿が土々呂小学校で綴方教育をやっていたのは昭和七年から九年にかけてである。男子生徒五十余名を尋常一年から三年生までの三年間持ち上がりで担当し、文集『光』を発行していた。当時は「調べる綴方」の指導が盛んになされていた時期である。木村もまた文集『光』の中で「調べる綴方」を展開していた。

「調べる綴方」とは別に「調べた綴方」という言い方もあるが、滑川道夫はこの違いについて次のように言っている。

「『調べる』か『調べた』は共に、児童の身の周りの事象を、研究・調査して、意味発見したことを書くという意向で共通する。しかし『調べる』は、その態度・意欲に重点がおかれる。『調べた』は、その結果・報告により傾斜がかかる。」(『日本作文綴方教育史3』)

調べる態度・意欲に重点を置くか、調べた結果そのものに重点を置くか、ということのようである。

また、佐々井秀緒は、「調べる綴り方の理拠とその実践」(昭和九年三月「調べる綴方の理論と指導実践工作」所収 東宛書房)の中でこの問題に触れ、その違いを明確に語っている。

「『調べる綴方』の実績に徴する時その名の通り、単に調べるための調べに終わつてゐることを発見する。(略)『我が家の調べ』だと

いつて古くさい系図を写して見たり、『交通の調べ』といつて、朝何杯昼何杯晩何杯といふやうなことを記録してみたりして了つてゐる。それだけで何が綴り方なのか。全く無意味である。」

調べた内容を羅列しただけ、それが「調べる綴方」の現状だといふのである。佐々井は「綴り方の邪道である」とさえ言っている。

では、「調べた綴方」とは何か。佐々井は「調べた綴方」の方が正しいと思うとした上で、次のように述べている。

「何故かといふと、『調べた綴り方』となると、調べなければならぬことを調べ、それによつて綴り方の作品内容をより正確なものにしようとして調べたのであり、従つて調べたことによつて綴り方が愈々真物になつたことを意味するからである。」

何等かの目的のために調べるのであり、調べた結果、より内容が深まり正確になるような綴り方が「調べた綴方」だといふのである。

木村寿が「調べる綴方」のほかに「調べた綴方」という言い方をしているのも、こうした事情が背景にあつたものと思われる。

しかし木村は、子どもたちに向けて「調べる綴方」と「調べた綴方」という言い方を厳密に使い分けているわけではない。

『ひかり』第十五号(昭和八年十一月)には、「調べた綴方(一)(二)」が部として組まれている。木村は「調べた綴方」と題する文話の中で、次のように述べている。

「調べた綴方」について

(略)「かかし」もおも白いですね。四人調べてみますね。吉井君などは糸をかいてみます。糸をかくと、しらべたことが、又はつきりします。吉井君の一ばんあとのところをよんでみなさい。じぶんのかかしをかかんがへてゐるでせう。調べる綴方は、ここまでいくとよいのです。(略)

「調べる綴方」は、説明の為に絵を入れるなどして調べたことを明確にし、自分自身の物を作り出すところまで行くの良い。つまり、そうすれば「調べた綴方」になるという意味であろう。

第十六号(昭和九年一月二十四日)でも「調べた綴方」の部が立てられているが、文話の題名は「調べる綴方について」となっている。

調べる綴方について

調べる綴方といふのは、たとへば、学校の前を通る人を調べるのに自てん車にのつた人が何人、あるいた人が何人；といふやうなことがばかりではいけないのです。さうしたものを調べたら、なぜこんな自てん車にのつた人が通るか、その人によつて自分でかんがへ、わからなければさいしたりしてかくのです。それでない、綴方といふものになりません。

「調べる綴方」は単に調べるだけのものであつてはいけない、捉えた状況の理由まで考え、明らかにしてこそ「綴方」なのだということである。つまり、それが「調べた綴方」なのだということである。

木村寿にとつて、子どもに「調べる綴方」と「調べた綴方」の言葉上の区別をつけさせること自体には、さして意味がなかつたのであろう。混乱を招く恐れのある「言語上の使い分け」よりも、「調

べる綴方」が単に調べるだけのものに終わらないように、結果的に佐々井の言う「調べた綴方」になることの方が重要だったのである。以下、木村寿の「調べる綴方」(「調べた綴方」)は何を目的として調べられたのか、文集『光』の展開に即して見ていくことにする。

2、「調べる」ことへの誘い

文集『ヒカリ』(尋常一年)が創刊されたのは、昭和七年六月一日、子どもたちが小学校に入学して二ヶ月も経たないうちである。しばらくは個々の綴り方を褒めたりしているだけで、指導らしき言葉は見あたらぬ。木村が文集で初めて文章指導らしきことを述べるのは、二学期(十一月)に出た第五号のあとがき「ミナサンニ」の中でのことである。

(略) コンナ ニ ウマク ナツテ クル ト ウレシイ デスネ。
コレハ ミンナ ミナサン ガ イロイロ シタコトヤ ミタコト、
カンガヘタ コト ヲ ハツキリ ココロ ニ トメテ オイテ
カイタ カラ デス。ジブン ノ ココロ ノ 中ニ ナンデモ
シツカリ イレテ オカナイ ト ジョウズ ニハ ナレマセ
ン。

(昭和七年十一月「ひかり」第五号)

ここではまだ、「したこと、見たこと、考えたこと」をしつかり心に留めておくように言っているだけで、「調べる」等の言葉が使われているわけではない。

木村寿が初めて「調べる」という語を使うのは、第八号(昭和八年一月)からである。この号では、「調べる綴方」の対象として、郷土「土々呂」を明確化させる構成もとられている。

第八号の構成(目次)は次の通りである。

ととろをかい文(五)

ミナト イチバ キセン コウエン フナオロシ
しごとをしたことをかい文(三)

子モリ モモノ木ノ中ノクサフルイ 子モリ
よるこんでしたことをかい文(二)

ミヅデツポ コリスベリ
よくみたことをかい文(二)

カラス アサ
なんでもないことをよくかい文(二)

オユ ニハトリケンクワ
あそんだことをかい文(一一)

カミデツパウ タコアゲ ミヅデツパウ エビトガニトリ
メジロ カネコリ タコアゲ カネコリ 水デツパウ

メジロトリ 犬
詩(うた) (六十六へん)

港や市場、汽船、公園、舟おろし等、土々呂を題材にした綴り方が「ととろをかい文」としてまとめられている。他は「したこと・みたこと」を書いた文である。これは、明らかに郷土「土々呂」を意識させる構成である。木村寿は「ととろをかい文」の前書きで、土々呂はここにしかない大切な所である、それを良くしていくのは子どもたち自身であると述べた上で、次のように言っている。

ミナサン ハ、コノ トトロ ヲ ドコニモ ナイ トトロ ヲ、
ヨク シルコト ガ 大セツデス。
トトロ ノ イロイロ ナ モノ ヤ、イロイロ ノ コト ニ
キヲ ツケテ ミナサイ。シラベテ ミナサイ。ピツクリ スル
コト ガ アリマスヨ。

土々呂を知るためには、気を付けて物事を見ることが大事である
と言ひ、更に「調べてみる」ことを促している。これが、木村寿が
文集の中で「調べる」という語を使った最初である。

綴り方「イチバ」(齋藤一)の評でも、よく書けている所をほめ
た上で、「フダイレノ アツタ サカナハ、ドンナ サカナカ
ワ カリマセンデシタカネ。大キナ サカナト イフノモ チヨツトワ
カリマセンネ。」と、もつと具体的に述べるように指導している。
具体的に述べるためには、よく見て、分らない所があれば調べて
おかなければならない。

「キセン」では、その点をもつとはつきり述べられている。

キセン

須田 進

キセン ガ ミナト ニ ハイツテ キマシタ。ナニカ シゴト
ヲ シテ キマシタ ガ シバラクスル ト デハジメマシタ。ナ
ミヲ キツテ デテイキマス。ミナト デ フネ ガ スコシ
ユレマス。

大キナフネ ト 小サナフネ ガ モウ ヨボサキ ヲ コエマシ
タ。ヨボサキ デ ブウブウ ナラシテ トウトウ ミエナク ナ
ツテ シマヒマシタ。コチラカラ ハ キカイセン ガ、コトコト
トコトコ ト イキマシタ。ムカフ ニ ナツタラ ヲ(オ)ト
ガ 小サクナリマシタ。

マタ キセン ガ ハイツテ キマシタ。ムカフ ノ クニカラ
キマス。ミナト ニ ハイツタラ ブウブウ フキマシタ。キセン
ノ 中ニ ヲル人 ハ ドンナコト ヲ オモツテキルデシヤウ
カ。ココガ トトロ ト オモツテ キルデセウカト、オモツタ。
フネ ニ ノツテキル人 ハ、シゴト ヲ シテキルデセウ。ウチ
ニ オル人 ハ、ドウモナイガ サブイデセウ。ワタクシハ ドウ

モナイガ、フネノ人ハ、サブシクテ コラエラレンデセウ。ソング
オモツテキタラ、フネガ ケムリ ヲ ダシダシマシタ。キセン
ハ クルツト マワツテ、ズンズン 又 カハツテ シマヒマシ
タ。コンド ハ ミエンダシテ、フエヲフキマシタ。

オキ ニ キタ フネ ガ インデ キマシタ。小サナフネ ハ
又 サカナトリ ニ デテ イキマシタ。

ソシテ ヨボサキ ヲ、コエテ、ズツト オキ ニ デマシタ。バ
ン ニ ナル トアレ ガ 火 ヲ アカシマス。

この綴り方に対して木村寿は、書き足りない点を具体的に指摘し、
そこを調べて書く面白い文になるのだと言っている。

(略) コノ文ハヨイデスガ、モスコシ、ツギノヤウナコトガ タリ
マセンネ。トトロニクル キセンハ、ドコカラクルノカ ソシテ、
ドコニイタノカ、シラベテカクト、オモシロカツタデスネ。ソノホ
カ、キセンガツンデクルニモツノコトナドモ シラベテ カクト、
オモシロイ文ガ デキマス。ワカラナイトキハ、センセイニキクコ
トデス。センセイモ ワカラヌトキハ、シラベテ オシヘテアゲマ
ス。

「キセン」は、港で見たままを書いた綴り方である。見たことに
対して思ったことも書かれている。第五号の「ミナサンニ」(昭和
七年十一月)では、綴り方がうまくなったのは「ミナサン ガ イ
ロイロ シタコトヤ ミタコト、カンガヘタ コト ヲ ハツキリ
ココロ ニ トメ テ オイテ カイタ カラ デス。」と言っ
ているから、第八号では、そこから一歩抜け出すことを要求してい
るのである。

つまり、木村寿の「調べる綴方」の指導は、まず身の回りを見つ

めさせ、「したこと、見たこと、考えたこと」を心に留めておくよ
うに指導するところから始まっているのである。そして三学期の初
めに「調べる」ことを指示し、その対象として郷土「土々呂」を明
確に意識化させている。その指導の成果は、三学期末に現れる。

3、初めての「調べる綴方」

「ひかり」第九号(昭和八年三月一日)の巻頭には、「うれしい
こと」が列記されている。その一つに、「ととろのことを、うたつ
たり、文にする人がだんだん、でき」たことが挙げられている。
郷土を見つめ、綴り方に書くように、指導していたのである。その
成果として、第九号に初めて「調べる綴方」が登場する。吉井己義
(本名・己男)の「さんばしどほり」である。土々呂で最も賑やか
な通りを調べて書いた綴り方である。

さんばしどほり

吉井己男

さんばし は ととろんうちぢや(のうちでは) 一ばん にぎやかです。
あたまつみや も あります。それから かなやごふくてん
や ひよどごふくてん も あります。まるきばす も あり
ます。おくわしや も あるし たばこやも あるし、りんり
きを 入れる こや も あるし、せいまいしよ も あつ
て、いつも 米 を ついて ゐます。

私と まゆみくんと たばこ を かいに いった ときで
す。あたまつみや には、人 が 五六人はいつて なに か
がやがや ゆて ゐます。がらすしようじ の にきに い
くと、私 と まゆみくんの かほ が うつりました。わ
らひました。あたまつみや の 人 が わらひました。かな
やごふくてん の まへ には、をんなの子 が きる すか

あとや小さい子供が かぶる ぼうし や、たんもん
 やら きのもの きれが 出してあります。ひよどの
 はうが 大きい が、ここが にぎやかです。をんなの
 人 が かひります。まちつと くる と お金もちに
 なるでせう。かなもんや に 出してある はた は いさ
 ましく かぜ に ふかれて ゐました。をんなの人は わ
 わ さわいで 手 を 出して 見せてください、その きれ
 は きのもの になりますか といつてゐます。
 まるきばすごや に いこや つて いつてみたら、一だいは、
 こや に いつてゐました。一だいは のべよか に いち
 よる のでせう。こや の 中から、一人の こもり が
 うた を うたひながら あそんでゐます。こやんなか は
 あぶら が ながれて によいます。まるきばす は ととろ
 ん とで のべよか に 人 を つんでいきます。
 田中 の おくわしや を 見ると、おいしいやうかんが ひ
 かつてゐます。まんじゅう が つんであります。それから
 いちんだまや あめや いちんだま の きなこのやうな も
 の が つけてあります。人 が すとはいつて ひとつ 「お
 くわしをください」といひました。
 「どのおくわしですか」と いひました。「あめをください」
 「なんせんですか」と いひました。「五せんがた」と ひとつ
 て かつてかへりました。さかななる人ぢやつたが、きつと、
 子供に わけてやります。
 たばこや は 田中くんとこです。をとこの人 が たばこか
 ひ に やつてきました。田中くんの をばさん が、でてき
 て たばこ を 一つ やりました。私たちも 一つ かひま
 した。たばこ を こて 又いきました。りんりきしや を
 入れるとこ は からつぷ です。せいまいしよ は きかい

で かたかた おと を たてます。せいまいしよ の 人
 は いそがしいです。いつべ かぶつて 米をあげたり
 れたりします。ぬか が ばらばら とんでゐます。
 そして まゆみくん が もう おそくなるから かへる と
 いったので わたくし も かへりました。

木村寿は「ほかの人にも、ととろのことをよくしらべておいて、
 かうして文にかいておくことは大せつなことですよ。しらべなけれ
 ばならないところが、たくさんありますよ。」と、他の子どもたち
 には「調べる」ことを促し、吉井己義には「己義くん、せんせいは
 ね、きみが、どんなことをしらべて、かいてくれるかとのしみに
 してゐるよ。」と期待している。

吉井己義は、その期待にこたえてか、一年生最後の文集「ひかり」
 第十号（昭和八年三月二十六日）でも、引き続き「調べる綴方」を
 書いている。染物屋である家の仕事・家族のことを書いた「ぼくの
 うち」という綴り方である。

これについて木村寿は「しらべたつづりかたです。二ねんになつ
 たら、もつとすすんでいかねばなりません。」とコメントしている。
 初めて「しらべたつづりかた」という語を使っていることが注目さ
 れる。

「評」でも、「うちの人たちにたいして、よくきをつけてゐます。
 しかしこれにかいてあることだけでは、もすこしものたりません。
 それこそ、しらべなければならぬことがあるのです。吉井くん、こ
 のぶんしふをもらつたら、どんなことをしらべたらよいか、よくか
 んがへて下さい。そして、二年になつたらすぐ、はつきりとした心
 で、かいて下さい。よい文ができます。」と、更に調べて書くよう
 に言い、激励している。

木村寿は一年生の三学期から「調べる綴方」の指導を始めている

が、結局、一年生の間に「調べる綴方」が書いたのは、吉井己義だけである。木村の意図するところをよく汲み取って綴り方を書ける子どもだったのであろう。

しかし、「二ねんになつたら、もつとすすんでいかねばなりません。」というコメント通り、その指導は次年度、二年生になつてから、多くの「調べる綴方」を生むことになる。

二、調べた綴方の展開

1、二年生当初の「調べる綴方」と集団制作

二年生最初の文集である『ひかり』第十一号(昭和八年五月四日)には、「僕たちのしらべた文」という部が設けられている。

日曜日の生活をかたる1(九へん)

佐藤清二君をおもふ(十三へん)

僕たちのしらべた文(三へん)

詩・ひばり(四十八へん)

日曜日の生活をかたる2(八へん)

(第十一号 目次)

「僕たちのしらべた文」には、三人の子どもが「調べた綴方」を書いている。吉井己男「四月の木のみ」、齋藤一「四月の花」、須田進「すずめ」の三人である。「吉井己男」は吉井己義であるから、二年生になつて新たに二人が書けるようになったのである。

木村寿は文話の中で、「かくことをきめて、きめたことをしらべて、それを文にするしごとをしていかなければならないのです。ただえんぴつをとつただけでは、文ができませんのです。しらべるといふしごとがあるのです。」(「しらべた文について」と、従来の綴り方からの脱皮を呼びかけている。

第十二号(昭和八年六月三日)になると、「学校生活(二へん)」、生活の場所(四へん)、五月の動植物(九へん)、遠足ちづ 平原遠足の二(十三へん)、平原遠足の二(八へん)、五月のあそび(四へん)と「調べた綴方」が多くなつてくる。「学校生活」「生活の場所」の中の二篇(吉井己義「うんどうばのあそび」、戸松愛明「水あぶつとこ」)は、木村寿が「綴り方倶楽部」(昭和八年九月 臨時増刊)に書いた「調べる綴り方の文話」に文例として引用したものである。この頃になると、木村もそれなりの手応えを感じていたのだと思われる。

第十二号で目を引くのは、「遠足ちづ 平原遠足」である。ここには、合計二十一篇もの綴り方が載せられている。木村寿はこの綴り方について、次のように言っている。

「かへつたら、月曜日に、遠足の文をかくことが やくそく出きたのは、うれしかった。

そして、それぞれ、じぶんでやくめをきめて、みんなが手をたたいて、よるこんでくれたことは、十二日の遠足のまへのべんきようとしては大へんうれいことでした。せんせいはそのときおもつた。遠足のまへの、こんなべんきようをして、遠足にいく子供は、おそらく このあたりにはないとおもつた。日本でもすくなひとおもつたよ。」

(「遠足と、遠足の文について」)

木村は「今までの遠足のやうに、はやつといつて、はやつとかへつて、あとになにもないやうなことになつてはつまらない」と思い、「平原の浜」まで行つて学校からの道のりを測り、簡単な地図を作っている。そして前日、「遠足で守るべきこと」(ルール)等を地図に書き込んで子どもたちに渡し、皆で「そのみちのりと、遠足についての いろいろのことをしらべ」ている。帰ってきたら綴り方に書くという約束もしている。「じぶんでやくめをきめて」というのは、

遠足のどの部分を書くかを決めてということだと思われる。平原遠足の一(十三へん)は、次のような構成になっているからである。

えんそくのまへのばん……………吉永民雄

えんそくのあさ……………谷 勇一

えんそくのあさ……………齋藤 一

いくみち……………川名信一

ひらばるのほま……………戸松愛明

ひらばるのほま……………吉井己義

かへるみち……………米沢正利

かへりみち……………秋山栄次

かへつたこと……………花岡友美

えんそくでみたわるいこと……………小泉光明

おもしろかつたこと……………岡崎忠雄

せんそごつこ……………高橋忠雄

せんそごつこ……………木村 隆

共同で遠足の全体を綴り方に書こうというのである。先生の作った地図をもとに色々調べ、書く役割を決めて遠足に行く。帰ったら分担した箇所を綴り方に書く。『ひかり』の中では、新たな「調べた綴方」である。

この中の六つの綴り方、「えんそくのまへのばん・えんそくのあさ・いくみち・ひらばるのほま・かへるみち・かへつたこと」を並べてみると、遠足前夜から帰宅後までの流れが、一つの遠足ストーリーとして成立することが分かる。

えんそくのまへのばん

吉永民雄

ばんにぼくは、あしたえんそくだ と とうちやんにいつた。あした雨がふらせんどかい といつた。とうちやんは さあといつた。このまへは雨がふつて えんそくが おもしろなかつた。ぼくは

ふらんといいがと しんばいした。かあちやんにいつたら、雨はふらせん といつた。とうちやんが、ほんたんあめを 二つかつてこいといつた。ぼくは じてんしやで いがたのおくわしやにいつて 十銭出して、ほんたんあめ二つかつてかへつた。又みかんもいるだろ、といつて、はりきよさんところについて みかんを十銭かつてきた。

こめのさんが、こんやは ええれ はたらくがやといつた。ぼくは、うれしいのだから わらひながら そこにおつた。こんどは しいたけと たまごをかつてこい。うちの下にいつて たまごをかつてかへつた。見てみると たまごを どんぶりの中にいれて たまごをわつて、それをふらいばんにいれてやいて そのやいたのをきつて、ほうちゆうできつて、そして まきずしの中にいれて、べんたうを つくりました。あしたの ようゐが起きたのでねました。そして、雨がふらんといいが、とばつかりおもつてねました。そしてねむつたとおもつたら、雨が ふり出しました。

ひよつと目をさましてみたら ふつてあません。ゆめでした。又ねむりました。こんどは お日さまが てらしてよいお天きのゆめをみました。又めが さめました。とうちやんは ぐうぐう ねむつてあました。そして又 ねむりました。

こんなに遠足を楽しみにしていたのである。雨が降る夢を見ては目が覚め、天気が良い夢を見ては目が覚める。遠足前夜の興奮である。

天気を心配していたのは、ほかの子どもも同じである。遠足当日の朝もあわただしい。朝、弁当を作っている母親もいる。

えんそくのあさ

齋藤 一

あさはやくおきてみると、空がたいへん あかるくしてきもちがよ

くありました。ゆふべしんばいしたが、いいかつた。

いそいで かほをあらつて、ほとけさんをおがんで、ぎつのうから本を出してしまつて、べんたういれに だいどころへ もつていきました。かあちゃんが一しやうけんめいつくつてゐました。

かあちゃん、にぎりめしを四つ、それから みかんを一つ、たまごを二つ、おかしを五銭がた いれてくんね。そんげいぺんにでくるもんけ、さうそ はじめさん、せんせいにおべんともつていつてやんね とかあちゃんが いひました。「かあちゃん、たまごがいくらあると」ときくと、かあちゃんは「7つ」といつたから、「それしたら ちやうどいいわ、ちつちやいねえちやんが二つ、ぼくが二つ、せんせいのべんとのわきに三ついれていこや」といつた。「はよ べんをつくらんけ」といふと、「なんと きがせくね」とかあちゃんが いひました。けさは、かあちゃんが しごとがおそいから だめです。

「ぼくのおべんとは、いくらつくつているとけ」ときくと、「一つしかつくつておらん」といふと ぼくが「はよつくつてくれんけ、たまごもまだいれちよらじかり」といふと、かあちゃんが「なんけ、一さんは」といひます。「はよせんとおくるるが」といつて、おかしも、みかんも かつてきて ぎつのうの中に みんないれてしまひました。すいとに 水をいれて「いつてまゐります」といつてがつかうへいききました。けさは ほんとに 天きがよくて みんなよろこんでおます。みんな ぎつのうを ふつたり 手をあげたりしていきます。がつかうが 見ゆるところに きたら、ぼくは はずつて、がつかうへいききました。

遠足の弁当を入れていくのは、リュックではなく、いつも使っている雑糞である。それを振ったり手を挙げたり、学校が見えると待ちきれず駆けだしている。

やがて出発の時間がやってきて、歩き始める。目的地までは、淡々と描かれている。みかんの花の匂うおだやかな日である。

いくみち

川名信一

ならんでいきました。まつばらをとほつていきました。ながたにきますすと いへが なんげんもあります。はしの下に、おとこの子が7人水につかつてあそんでゐました。小さい子が手を たたいてよろこびました。みかんのよひが かざります。いへのわきに、みかんの白い花が さいてあます。おだいさんが みのねきに そこそおいてあります。そのねきには 花がさしてあります。あか花も さしてあります。

せいまいしよのまへに はたが たててありました。ほしのしるしがついてゐました。あしこの人は、まんしゆにいつてゐるとだと、せんせいがいひました。せいまいしよは 米やらつくところです。きかいのおとがしてゐました。人が しごとをしてゐました。

又はしにきました。ここは まへより水が おい。下ん方が さらさら ひかつてながれちよります。みちのわきに、おせん人がならんで みてゐました。どんどんいきます。大けな まつの木が ならんであります。みちが かげりです。すずしいところです。

まつの木の上を お日さまがいきます。いへが まつの木の下にあります。人がみてゐました。そして はなしてゐました。なん人もおりました。又みかんの花のよひがします。いいよいでした。いがだでも 人がみてゐました。子をかるて はなしてゐました。おなごん子どもやら まつの木の下で あそんでゐました。

いがだんねけをいくと、おかどみのせいとが ほしには あかすじときねすじを ひつばつてきました。そして、男の子が 木村せんせいと いひました。みんな せんせいといひました。これは、せんせいが、一年のときと二年のときと おしへたといつた。みんな

せんせいの そばにいきました。「かへりには がつこによれ」と
せんせい が いったら、「はい」つて、はしつていった。
又 むこにいくと、ささめばしがきました。水がいつぺあります。
さかなが およいでゐました。なんびきも およいでゐました。又
をんなのせいとがきました。これも せんせいといひました。五年
せいとせんせいがいひました。つねどみのねけにいくと 又おだい
さんがありました。かみさんにれいをしました。

日中、多くの人が家の外に出ている。小さい子どもたちも外で遊
んでいる。精米所の前に星印の旗が立ててあるのは、出征兵士の家
なのだろうか。

途中で出会った生徒たちは、木村寿が岡富小学校で教えた文集
『日の光』の子どもたちである。

平原の浜では、木村寿が最初に綴り方指導を始めた南方小学校の
生徒にも出会っている。当時一年生だった子どもたちが、この時に
は高等科の生徒になっていた。

ひらばるのはま

戸松愛明

ぼくたちが、ひらばるについたときが 九じ五十ふんでした。せん
せいが まつかさを ひろつてこいといひました。ひろつてきまし
た。せんせいが「それで せんそうするぞ」といひました。みんな
が うれしがつた。せんせいが二つにわけてくれた。あつちは一く
みと二くみでした。こつちは三くみと四くみでした。それから は
じめだしました。ぼくが すすんでいくと、てつぼの玉が どんど
んとんできます。ぼくは玉ん中をくぐつて一ばんさきに、いなだを
やつたけれども しにません。それだから ぼくは あつちのぢん
につつこんでいきました。ぼくがつつこんでいけば、ぼくには 玉
が ひとつもあたりません。ぼくは とうとう すだくんどもを

やつつけてしまひました。それで ぼくたちが ばんざいをしまし
た。そしたら、よねざわが、よこから 松かさを くせたもんぢや
から ぼくのかほから、ちが どんどんでました。ぼくは ちをお
さへて やつつけました。そのとき、まもるくんが 木にのぼつて、
ちようど どしんとおてて、はなぢが出ました。そして だりから
か かみをもらつてふいたら かほぢゆう ちいだらけに なつて
りました。そして せんせいが そのうみで かほあらよ、とい
ひました。そしたら、みんないつて、まもるくんが あらひました。
ひらばるのはまは、大きな なみが ざあざあ きてゐました。け
ふは よい天きですから、人どみは うみにつかつて、あたまかり
じやつほり なみを かぶつたりしました。うみにつかつて、の
ぼるが だいぶんふかいところにいきました。せんせいとぼくと、
みやのくんが それをみました。そしてせんせいが、のぼる、とい
つてこゑを たてたら おかさね上つてきました。
そのとき、よその大きなせいとがきて、せんせいとおはなしをして
ゐました。みなみかたのせいとで、せんせいが一年のときおしへた
せいとです。いまは こうとう二年です。この子供は みんな さ
るまたをはいて、水をあべてきました。そしてせんせいをみつけて
きました。子供は二人で、はなしました。木村せんせいが、「ふと
つたね」といひました。二人は わらつてはなしました。せんせい
は、「あそびにこい」つてわかれしました。ぼくたちは もう だい
ぶんあそんだから 松の木の下に あつまれがあつてならんでかへ
りました。よその子供が ぎようさんきて、木村せんせいに、さよ
ならをしました。

せんそうごつこや海につかつたりして時を過ごし、遠足も終わり
になる。帰り道も徒歩である。遊び疲れて、足も重い。

かへるみち

米沢正利

ひらばるのはまで、べんとやたべました。せんそごつこやししました。なみにもつかりました。も、やめて、せんせいたちも、も、かへろやといひました。ぼくはたかはしと手をつないで、松のあひだをくぐつてかへりました。「よけいばしよにきから かへらんならんでやろかい。」「よだきなあ」と たかはしといひながら 手をつないで みちをぼつぽつかへりました。

かじや大かじがあつたら、じきならすかねがあります。又ぼつぽつかへりよつたら 水がのみたい。せんせいが がつかうまじのむなといつたから、おかしなかほして ぼつぽつかへりました。はしがきました。又じつといきよつたら くるぎのぶかたがきました。くるぎのぶかたのばばさんな ばくのせんせいに れいをしました。あしこのあんちゃんも れいをしました。みんな くるぎのぶかたは かねもちだと、いひました。

又はしがきました。みづがのみたい。たまらなかつた。あと二つはしをわたるとがつかうだとせんせいがいつた。みんなこらへてあるいた。一つはしがきました。そのはしの下には さかなの子がたくさんおよいでるました。さかなんこになると 水がのまれるねといひました。とびこんで あのさかなの子を とろと おもひました。それでもとびこむと せんせいから おごられる。石をなげたら ばらつとちつて にげました。あら、んまいちつてにげました。あと一つだ わたれ、そをするのがつかうがくるんだ。みんなげんきがついた。そこにも さかなの子がおよいでいます。あき山くんが、こ石をなげたら、よつてしまひました。ぼくもこ石をなげた。もうがつかうがちよりました。せんせいが、かけ足つてはしりました。がつかうにつきました。水をいそいでのみました。ぼくはすいとにいて、ぐうぐう のみました。もう二じはんでした。

かへつたこと

花岡友美

えんそくから かへつてきました。うちのぢいさんが、「だれたどが」と いひました。ぼくが「だれた」といひました。そして ぢさんがどこまでいたつかといひました。「ひらばるのけいばじようの下までいつた」といひました。ぢさんが「びゆに よつてくるもんじゃ」といひました。ぼくは「びゆから よつていぬると えいなん」といひました。ぢいさんがぼくに、「えんにいつてみよ」といひました。

ぼくはいつて見ると、みのりやんが あめを二つくれました。そしてとけいを見ると、三じはんでした。三じはんの きどうしやがきました。きてきを ぴいつとならしました。

えんにすわつてみると、足が だれてぬます。じつとしてみると、ねむたくなりました。みんな だれたると おもひました。あしたは、にちよだから うれしいです。

複数の子どもの手になりながら、遠足前夜の興奮から帰宅後の疲れ切った様子までが滑らかに描かれている。中でも、遠足前夜や帰ってからのことを書いた「遠足の綴り方」は珍しい。

滑川道夫は、前述した「べる・べた」の違いについて述べた文に続けて、「その後わたしは、この個人的な調べる綴方を発展させて『集団制作』(『綴方生活』昭6・6(9月号))にとり組んでいくことになる。」と述べている。その集団制作について論じた「綴方に於ける集団制作の理論と実際(一)」「綴方生活」第三巻第六号昭和六年六月一日)の中で、滑川は、「集団制作に就いて、次の六型を考えた」とAからFまでの図を示している(ここでは便宜上図は省略し、付記されている「注釈」を挙げることにする)。

A図 集団の各個が素材(作品される材料)を分担する場合。

B 図 集団の各個が素材を分担し且プロットの分割を各個が担当する場合（連作の形態をとる）

C 図 集団の各個が異なった素材を分担する場合。

D 図 集団の各個が同一素材から協働で作品行動をとる場合。

E 図 集団の各個が同一素材を対象として、作品のプロットを分割する場合。

F 図 集団の各個が作品行動の縦の分割を担当する場合。

（筆者注 F 図は「素材、選択、思想、記述、推敲」を分担する場合である。）

木村寿指導の綴り方「遠足」は、この図で行けばE図に当たるのだろうか。遠足という素材を複数の子どもが「遠足前夜から帰宅後」までのプロットを担って、いわば一つの作品を作り上げているからである。したがって、「遠足」のような書き方は、集団制作の一つの型として既に滑川道夫によって考えられていたことになる。逆に言えば、「遠足」は「調べる綴方」の集団制作だったということである。事前指導を伴った集団制作である。

しかし、「えんそくのあさ」や「ひらばるのはま」、帰り道のことなどはそれぞれ二人の子どもが書いており、他に「せんそごっこ」（戦争ごっこ）など、当地で遊んだことなども別個に加えられているので、「遠足ストーリー」を作ることのみが頭にあつたわけではない。「えんそくでみたわるいこと」等では、遠足での反省すべき点もおさえられている。幾つか例を挙げてみる。

* 遠足に行く前に飴などを食べた人がいる。

* 遠足に行く道で、あばれていた人がいるが、自動車や自転車が来た時危ないから悪い。

* 橋から石を投げたのも下で子どもが水を浴びているから危ない。

* おやつをいっぺんに食べてしまつて、他の人に「呉れ」と言つ

たりするのはおかしい。

「みんな せんせいから いはれるときは、はいはいちて いふことをききますが、すぐわすれてしまつて、いふことを ききません。」ということらしい。

木村寿の「調べる綴方」では、その「調べ」から何を求めるか、何を学ぶか、が焦点となる。その点は集団制作でも同じである。

この後、『ひかり』第十三号・十四号・十五号・十六号では、ますます「調べた綴方」が多くなつていく。

前述したように、第十五号（昭和八年十一月）の文話で、木村寿は「吉井君などはゑをかいてゐます。ゑをかくと、しらべたことが、又はつきりします。吉井君の一ばんあとのところをよんでみなさい。じぶんのかかしをかんがへてゐるでせう。調べる綴方は、ここまでいくとよいのです。」と述べている。「調べる綴方」に説明のための絵を入れること、自分なりの物を考えることが評価されているのである。この、調べた事に対して自分の考えを持つことは、「心を調べる綴方」へとつながっていく。

2、心を調べる綴り方

昭和九年三月一日発行の『教育・国語教育』第四卷第三号には、木村寿の綴方指導案が掲載されている。尋常二年生の「三月の教材」を挙げ、指導案例を示したものである。

そこでは「心を調べる綴方」が展開されている。目的には「ある生活事実を中心に、自分達の心は如何に変化するかを認識せしめる。」とある。人間の心がいかに変化するものであるか、それを捉えさせて、「生活反省させたいと思ふ」というのである。

「子供の遊びを見てみると、今迄面白さうに遊んでゐたかと思ふと、もう喧嘩をしてゐる。面白く遊んでゐる中にも、子供の心が色々変化してゐるのを見る。然るに、子供達はさうした事に一向頓着なし

に遊びが繰り返へされてゐる。さうした無意識の中に葬り去られてゐる変化する心、又は起る心を調べさせて、生活反省させたいと思ふ。」(教材考)

例えば、遊びの中において「面白い時は、どんな時か。面白くない時は、どんな時か。はがゆくてたまらない時は、いやでたまらない時は。」と、その時々々の気持ちを記述させ、客観的に認識させるのである。

* 尋二 綴方指導実際案 『教育・国語教育』第四巻第三号

文例

かねんわめぐしの心。(筆者注:「金の輪回しの心」の意味)

おも白くてたまらん時の心。

かねんわは自てん車のわのふりやつでします。竹の1mぐらいのやつを、自てん車のすじの所に入れてまはして行きます。風がはばしく吹いてゐる時、風と一しよに行くと、からだがかりなつてまふて行くごつある。鳥のやうにある。そんげな時は、どこまででも、まはして行きたいやうな心になつて、心がおも白い。

おじい時の心。

一しやうけんめい風と一しよにまはつて行く時、向こふから自どう車や自てん車がくるとつきあたると思つておじいしてたまらん。風が吹かないと、かぢがんまいととられるからよいが、あんまり風が吹く時はかぢがとられんからおじしてたまらん。

はげらしい時の心。

風が吹いてゐる時、おも白いからずつとまはして行つて、かへる時に、風が吹くもんだから、いくらやつてんようかへられない。あせが出るほづやつてもかねんわがいかんからはげらしいして、かねんわをもつてかへる時があります。又人とかねんわをはえぐらして行く時、僕が勝つちよつて、よろこんである、たんぶの中にかね

んわがころげて行きました。それは石が道の中にあつて、しゃかねんわがひつかつたからたんぶの中ころげました。はげらしいして、とつてきて、道の石をたたきました。人とはえぐらすると、勝とおも白いが、負けると、はげらしいしてたまりません。

うれしいしてたまらん時の心。

僕がかねんわをめぐして、こまい道を行きました。かねんわが、がらんがらんゆて僕はおも白くてはしつてゐましたら、あつこの子が、「かねんわが来た」といつて出てきました。そして、「あん子はうまいね、中中上手ちやがや」といひました。僕はうれしくて、ずつとまはして来て、又そこを通りました。そしたらあつこの子が又、「又来たがや、上手ちやね」と又ほめました。僕は、その日は、あつちこつちまはしました。

いやな時の心。

僕が、かねんわをおも白くまはしてゐる時に、おこねもんが、かせかせいひます。かさんとながするからかす時があります。そんな時は、おも白くても出来ません。おも白い時なら、おこねもんが、かせかせといひます。僕はいやな心がします。

この文例からどのような生活反省が生じるのか、具体的な説明はなされていない。しかし子どもたちの話し合いから様々な反省点が出て来ることは、容易に想像出来る。例えば「おじい時の心」(「恐い時」の意味)からは風の激しい時の危険性、「いやな時の心」からは年下の子に何かを強制した経験、それに対する反省などである。

二年生では「心を調べる綴方」までやつてゐるのである。しかもそれは、自分自身だけの反省材料ではなく、学級全員の反省材料でもあったのである。

3、三年生での集団制作

三年生の最初の文集『光』第十八号の構成は、次のようになっている。

◎僕たちの学級

四月の行事：四月のけつせき：教室の花：四月の天気：級日記
：当番日記

◎僕たちの見た動物の生活

燕(三)、じよろくも(二)、雀(三)、あり(二)、にはとり(三)、子ねこ、ぶた、牛、うま(二)

◎詩になる文

◎八日間の日記

◎観察日記

雲日記、きじ豆の太り

「僕たちの学級」は、「四月の行事・四月のけつせき・教室の花・四月の天気・級日記・当番日記」の総称である。それぞれを個人が担当して、様々な角度から調べ、「僕たちの学級」の全体像を描き出す。当番日記は当然のことながら毎日担当が変わっている。級日記は、二人の子どもが一週間交代で書いている。

「四月の行事」は四月四日から始まっている。始業式である。

四月の行事

四月四日 曇雨

始業式

吉永民雄

ちようくわいで竹内先生が昭和九年の始業ですから、今日は式です、みんなおとなしくしてゐて下さいとおつしやいました。学校のさくらはさいてゐます。気持がよいです。僕はさくらがすきですから後でさくらのさいてゐる所を見まはりました。さくらの花は白くて小

さいですが、よい花です。見まはりながら、三年のはじめだ、一生けんめいやる、と思ひました。

一学期の最初の日から綴り方指導が始まっているのである。一年からの持ち上がりであり、綴り方が日常化している子どもたちには、それでも何ら違和感は無かつたのだろう。翌五日は入学式、後は新旧先生の紹介、規律週間と続いていく。

「教室の花」は、子どもたちが教室に花を持つてくるたびに付けられた日記である。五月十一日の記録を見てみる。

五月十一日

花岡友美

中野君がごめざくらを持つて来ました。花は白くて、ちよぼちよぼかたまつて、うの花のやうです。葉もうの花ににてゐます。花があつまつて、まるくなつて美しい花です。僕は、あまり見た事のない花でした。勇一君は、せきちくを持つてきました。赤色で、枝がまつすぐ出た上にさいてゐます。葉は長いです。勇一君ところは道ばたですから、ほこりが花にいつばいしてゐます。これは先生の机の上のびんにさしました。

誰がいつどんな花を持つてきたかという、単なる調べた記録ではない。毎回、花が、細かく観察されている。その花に対する筆者の感想も述べられている。

「僕たちの学級」の文について

(略)とにかくこれらの文は、皆よくよんで、自分のこと、学級のことをよくかんがへて、よい自分、よい学級を作つていくには、どんなにしていつたらよいかと思つて下さい。一人がよくなり学級がよくなると、学校もよくなります。此の外学級について、調べたり

皆と話たりする事はたくさんあるはずです。文を書いてよい学級をかんがへ、よい学級の上にも力のある文を書いていませう。

ここでも強調されているのは、文を読んでよく考えること、学級を良くしていくことである。そのための「調べる綴方」である。したがってそれが集団制作の形をとるのは、いわば必然であった。

「僕たちの見た動物の生活」を対象とした綴り方では、その目的を「見たり調べたり書いたりする中に、これらのものから、よい生活方をべんきやうが出来るからです。」と述べている。

「燕のくらしをよんで下さい。ひなにえさをたべさせるおや燕の心がわかります。子供である僕たちは、よい事をかんがへさせられます。『じよろくものす作り』をよんで下さい。君たちにかかつては、一たまりもないじよろくもですが、すを作る時、つくつてからの心と考えると、僕たちの生活方の上に色々工夫をせねばならぬ事を教へられるですね。(略)

見ることも、もつとくはしく見て、調べる事ももつと正しく調べて、動物の生活の正しいことを知りませう。そしてどこを自分たちの生活に取り入れていくか、その事をもかんがへて下さい。こうなつてこなければ、君たちがくろうして書く綴方に、ねうちが出てきません。ひかりの子よ、葉の上にとまつてゐる、1cmの虫けらも、一つの生活方を持つてゐるのだよ。」

じよろくものす作り

花岡友美

木の間に作る、

木の間に作る時一つの枝にとまつてねばを流します。いくらでも流します。風が吹いて来てそのねばを向ふの枝にもつて行きます。向ふの枝につかないで、空にすうくしてゐる時もあります。そのねばも一つの枝にひつつくと、そのねばの上をだんだんたづつて、又

まん中ごろからねばを流します。その流したねばが又あつちの枝にひつついて、そのねばをたどつていきます。どんくらゐかかると知りませんが、のちにはりつばに作り上げます。作り上げるとなかなかりつばです。くもはうれしいやうに、あつち行きこつち行きしてゐます。

くものねばはなかなかぢやうぶです。ちつとぐらいひつばつてもきれません。くものねばはひくい所にもはりますが高い所の木のかげなどに作ります。

出来上ががたくものす。

くものすが出来るとふくろをかぶります。そしてその中にはいつてゐます。じよろくもは、ふくろは持つてゐませんがすのまん中に白いものをはつて、そのまん中にすわります。

くもは、はいなどをまかせやうと思つてなげるとすぐにげて、ふくろの中にかくれます。

じよろくもは、すぐはしつてきてくるとまきます。さうして又前の所にいつて、じつとしてすわつてゐます。すをうごかすと、ちよつと足をうごかしますが、じつとして、すをびよんびよんうごかします。

じよろくもは、すのまん中にをらずに、枝の所におる時があります。僕が此の前見てゐた時、雀からくはれました。くはれんやうにかくれてゐるのでせう。大きなのは、すぐ見つかるから、早くたべられます。

じよろくものねばは美しい時があります。雨がふつた時は、つゆがいつばいぶら下つてゐます。雨のふつた後でお日さんが出ると、ねばがぴかぴか光つていいのです。

女郎蜘蛛の巣作りの、一生懸命さ、作り方の工夫、作り上げた時の嬉しい様子等に学ぶべきものがあるというのである。どんな動物

でも、たとえ一cmの虫けらでも生き物であり、それぞれの暮らし方があるのだ、そこに学ばなければいけないと、木村寿は言っている。色々な動物の生活を、それぞれに分担して調べ、綴り方に書くことで、クラスの皆がそれらについて学ぶことができる。そこに集団制作の意味があった。

また、燕(三篇)、じよろくも(二篇)、雀(三篇)、ありご(二篇)、にはとり(三篇)、子ねこ、ぶた、牛、うま(二篇)と、その多くが複数の子どもによって書かれている。したがって、同じ素材でも書き手が違えば見方や感じ方が違うことが分かるようになってくる。多様な見方を生み出すのも集団制作の利点である。

自分たちの生活を良くしていくために学級を調べ、動物の暮らしから学ぶ。それは『光』第十九号では「生活を聞く」という形で展開されていく。

4、生活を聞く

『光』第十九号(昭和九年七月二十三日)の構成は、「生活を聞く」→「学校生活」→「観察日記」→「雨と生活」の四部から成っている。ここで注目されるのは「生活を聞く」である。その扉には次のような木村寿の言葉が記されている。

「生活を話す事は大切である。聞いてもらって自分をよくするものを話してもらふために。」

生活のあとを書くことは大切である。いつも話してゐられない僕たちは、書いて、よんでもらって、自分の生活をよくするものをしらせてもらふために。

又、僕たちは、言葉をきくばかりでなく、生活のあとを書いたものをよんで、友だちの生活を語る心を聞かう。(略)友だちの生活をきいたら、その心をこやしにして自分の心を丈夫に、そだてていかう。」

自分の生活を調べて書くのは、読んでくれた人の意見を聞いて、自分や自分の生活を良くするためであること、また友達の綴り方に表れた「心」を聞き、自分の心を育てる糧にすべきことが説かれている。

「生活を聞く」には八篇の綴り方が収められているが、その一つ一つに評が付けられ、「こ、の文から何を聞くか」が具体的に示されている。

最初の綴り方「まらそんにはしつた」(吉井己義)は、海軍記念日(五月二十七日)に毎年行われるマラソンに参加したときのことを書いたものである。

四年生以上が参加するのが原則だが、希望すれば三年生も走ることが出来るのである。母親に「怪我をするから」と反対されたが、どうしても走りたく、父親に相談して許可をもらう。クラスの友だちと「走ろう」と約束したこと、毎日練習したこと、当日の緊張感、走っている最中のこと、十等以内に入りたいと思っていたが十三等だったこと、それでも嬉しかったこと等が、感想や自分の考えもまじえて詳しく書かれている。

この綴り方から何を聞くか。

1(まらそんにはしつた)……四年生にまじって、まらそんにはしらうとけつしんして、はしるまでにれんしふして、その日のことをよくわかるやうにかいた文です。この文をよんでみると、吉井君の心がいろいろきかれます。はしりたい心、あぶないといはれる母の心をしりながらはしりたい心。ゆるされて、はしるけつしんをかためる心。まらそんにはしつたといふだけがわかるだけでなく、はしつてゐる自分の心、はしつたあとの心などのきかれる文です。

べんきやう……この文で、さうした吉井君の心を綴り方帖にかいて下

さい。

(二)この文から何を聞くか)

綴り方に表れた作者の心を捉えさせ、それをノートに筆記させている。

「自分の生活できいてもらいたいことがあつたら、どしどしかいて下さい。きいた人は考へて下さい。人の話をきいたら考へるのです。そして自分の生活をよくしていくのです。よくきく人は、自分の生活をよくする人です。」(「同前」)

綴り方に描かれた「生活の心」に学べというのである。

この考え方は、『光』第二十一号(昭和十年一月二十六日)においても繰り返し述べられている。同号の「僕たちの心」には「校長しけん(吉井己義) 僕とよね(松永行雄) お母さんのかせい(黒木重行) お母さんの病氣(谷勇一) なくなつた地球鉛筆(齋藤一) あばれがけんくわになつた(高橋敏郎)」の六篇が載っているが、その評には、綴り方をなぜ書き、なぜ人の綴り方を読まなくてはいけないかが明確に語られている。

「この六つをよんで、それぞれの心を知つて下さい。そして自分の生活をよくかんがへて、自分にもこれにた心があつた、といふことを思ひだしたら、その心についてかんがへて下さい。これを書いた人も、この文を又しつかりよんで、其の時の心を又かんがへて下さい。そして、これに対する心でかわつたことがあればいせいでおくといいのです。」

自分でかんがへたことでも口でいへないこと、色々なことにぶつかつて、口で色々と言へない人は、こんなにして、文に書いていつて下さい。こんなにして書いてみると、自分のしたこと、心が、よい方へだんだんはなされていくものです。」

綴り方が心の表現手段であること、自分の心を客観的に見、考え

直していく手段でもあることが書かれている。同時に、人の綴り方を通して自分の心を振り返ること、それが自分の心と生活を良くしていくことでもあると述べられている。

自分の心を見つめ、それを表現する。いわば「心を調べる綴方」である。そしてその表現された綴り方を更に検証し、そこに表れた心について考える。そのことによって生活を正し、更にその生活を表現していく。

つまり、①観察する・調べる ②書く ③読む ④互いに読み合
い、話し合う ⑤書く という段階を踏まえているのである。

書かせる前の事前指導から、書かせた後の綴り方の活用まで、綴り方の教育的効果を十分に引き出す指導であつたと言えよう。

三、木村寿の「調べる綴方」の位置

太郎良信は復刻版『綴方生活』解説⑤(月報)の中で、当時の「調べる綴方」の状況を次のように説明している。

滑川の「集団制作の理論と実際」による問題提起と、それに触発されて生まれた村山の実践指導の作品「天神様のお祭」が、八月号に、同時発表されると、それが全国の綴方教師に与えた影響は、ほとんど衝撃的だった。そして、その反響は、翌一九三二(昭和七)年から三三年へかけて、全国的な「調べる綴方」ないし「調べた綴方」の普及流行の時代を出現した。それには、「調査しつづいた事項を取扱ふもの」としての「調べる綴方」の提唱をしていた千葉春雄(『綴方生活』三〇年十一月号「綴り方の小さい理論」)が、高師訓導をやめて、この三一(昭和六)年四月『教育・国語教育』(厚生閣発行)を創刊・主宰するようになって、『綴方生活』の発行が困難な状況に陥っている三二年から三三年へかけて)千葉のリードによる「調べる綴方」の展開と普及・流行への寄与が大きかったの

である。そしてその集大成ともいふべき『調べる綴方の理論と指導実践工作』（東宛書房）が三四年三月『綴り方倶楽部』の臨時増刊号として発行されるのであった。

木村寿の「調べる綴方」も、ここに述べられている全国的な流れの中にあつたものである。千葉春雄によつて見出された木村寿は、『調べる綴方の理論と指導実践工作』にも執筆しており、「千葉のリード」の中にあつたことは間違いない。

昭和十年二月には、『系統的实践文話 尋常三学年』（東宛書房）が出版されている。千葉春雄が編集発行したものである。木村寿の文話は、その巻頭に掲載されているが、その題名は「生活を知る綴り方」である。「一 学級生活をよくする綴り方」「二 郷土・家の生活を知る綴り方」から成っている。木村寿の「調べる綴方」は、まさに「生活を知り、生活を改善する綴り方」だったのである。

同書には角虎夫の「生活観察の綴方の文話」が掲載されている。角は「自然観察の綴方」について説明した後、「生活観察の綴方」について述べ、その文例として土々呂小学校の綴り方二篇を引用している。生活行事を観察して書いた文例「おもちゃを売つてゐる店」（尋三 花岡友美）、生活を調べて書いた文例「ぼくのがくようひん」（尋一 吉井仁義）である。

「おもちゃを売つてゐる店」は、祭りを観察して書いた綴り方の一部である。祭りの日に出た店のことを書いている。

おもちゃを売つてゐる店（祭りの観察の一部）

尋三 花岡友美（宮崎）

僕の家のとなりにかまへてゐます。僕の家は神様の近くです。神様のところからおりて来るとすぐ見えます。

だいを四方に置いて板をおいて、その上にきれをしいてゐます。

自どう車もき車もあります。刀もあればひかうきもあります。小さい子供のよるこぶやうな物ばかりです。

店の人はおもちゃを色々いごかしてみます。さうすると子供ははしがります。おもちゃ屋が近いので、うれしいかほして行きます。

お客さんは子供たちです。一銭持つて来て、十銭や五銭のひかうき何やをくれないといひます。店屋の人は「これは一銭ではかはない」といふと、わけがわからないものだから、「くれないくれない」といひます。

この店はなかなかうれしました。土々呂にはないもんだからみんなあつまつてきます。この店屋の人は毎年来るもんだから、知つておるからよく売れます。自どう車をうごかしたりすると、僕たちもほしくなります。

角虎夫は、祭りの日には店がたくさん出たり芝居や活動写真もある、他所からお客さんも来る、だから祭りの観察はいくつもしなければならぬのだとした上で、「かうして初めて皆さんの地方の祭りが、その祭に於ける皆さんの生活や皆さんの人々の生活がはつきり分かつて来るのです。」と述べている。

また道具がなければ勉強も遊びも働くことも出来ないのだが、普段はそんなことは忘れてしまつてゐる。

「所が私達の生活はかういふ物によつて営まれているのであります。だからかう云ふ私たちの身のまはりの物がどんなに私達に役立てられてゐるか、なくてはならないものであるか、どんなにして使はれてゐるかを知る事は、私達の生活を知る上に大事な事なのです。そのためには、それをまづ、調べなければなりません。」

角は、子どもたちの生活がいかに多くの物に支えられてゐるか、それを知ることが大事だと、環境に目を向けるべきことをも言っている。

全体に角虎夫の物言いは木村寿のそれに似ているが、「考え方」を共有すると同時に、木村寿の「調べる綴方」の実践を高く評価しているのである。

木村寿指導の「調べる綴方」は、尋常二年生、三年生とは思えないほど観察が鋭い。「おもちゃを売つてゐる店」でも、「小さい子供が喜ぶような物ばかり」を並べて、子どもの気を引くためにおもちゃをちよつと動かしてみせる、そんな店の人の売るための工夫が鋭く捉えられている。金銭価値の分からない幼い子供の様子なども、しっかりと描かれている。

ただし、木村寿の場合、生活観察とか「綴り方による生活改革」とは言つても、それはあくまで個人レベルの話で、政治的・社会的なレベルに踏み込んだものではない。共同制作にしても「百姓の生活はなぜ苦しいか」(石川峡「高等科の綴方科経営」『綴方生活』昭和六年四月号)といったようなテーマ(傾向)とは無縁である。これは高等科の例だが、尋常科にしても、次のような綴方は『光』には無い。

えらくなれない

尋四 男

僕はいくら勉強しても中学へはいれないだらうと思ふ。それはうちにあまのお金がないからである。僕は大きくなつたら、たいいお父さんのやうに百姓になるんだらうと思ふ。さうしたらあまり勉強なんか出来ないだらう。よく勉強するとえらい人になれるといふが、僕は中学へはいれないから、とてもえらい人なんかにはなれないと思ふ。

(川口半平「尋四綴方指導について新学年の感想」

『綴方生活』昭和六年四月号)

川口半平は「『えらくなれない』は立身も学問も心がけだけでは

出来ない。金あつてこそ其の志を果たすことが出来るのだと、貧乏な家に生れたと言ふ偶然な運命が、希望も発奮も潰してしまふ事実に対してのひそかな歎声である。等閑に附してならない生きた問題が含まれてゐることを何人も感ずるであらう。」と言つてゐる。

「等閑に附してならない生きた問題」であることはその通りだが、「かうした作品の次第に生れ出ることを思ひ、かうした作品を生む母体としての児童の生活の育ちを思ふと、私の心は少なからず愉快である。」(川口)とは、木村寿であれば言わなかつたに違いない。

むろん川口は社会認識への目が開かれたことを愉快と言つてゐるのである。「えらくなれない」を使つて、生徒たちにこの問題を考えさせたのだから。

しかし、木村寿であれば、中学へ行くことと「えらい人」になることは別だという方向へ目を向けさせ、皆に考えさせた後の綴り方まで引用掲載したと思われる。木村寿のモットーは「生活を良くする」「しっかりとやれ」である。嘆くことではない。嘆きを解決することである。

あるいは学年の違いということも考えられる。

心の生活は此の学年になつて始めてあらはれると言ふ特殊なものでないことは言ふまでもない。幼い頃から不断に育つて来て居るのであり、且つこれまでの文の中にもあらはれて来てゐるものなのである。しかし、これまでは意識的に内観的な態度で、心の生活を述べると言ふやうな事は少なかつた。又あまり早くからかうした態度を懲漚することは、却つて生活から湧き出ない概念的な感情の表現へ導く危険をもつて居た。此の学年頃になれば創作意識の発展より見ても、外に向いてゐる眼が次第に内へも向けられて、よほど内規的なもの、観方が進んで来る。そして単に心情の動きを述べると言ふばかりでなく、批判的な気持の動いたものがあらはれて来る。

(川口半平「3 ひらく眼」)

「えらくなれない」のような綴り方が『光』に出てこないのは対象学年が低いからということも、もちろんあるだろう。

しかし木村寿は尋常二年生の三学期頃には「心を調べる綴方」をやっているのである。川口が言うようにそれが「概念的な感情の表現へ導く危険をもつて居た」かどうかは別にしても、「心を調べる綴方」のことを考えると、学年的な問題からのみ「えらくなれない」や「百姓の生活はなぜ苦しいか」といった傾向の綴り方が出てこなかったとは思えない。必要だと思えば木村は指導したはずである。

やはり木村寿の綴り方に対する考え方から来るものであろう。木村寿の綴り方指導は、「前向き」である。道徳的でもある。それは対象学年が低学年及び三年生だったこともあるが、昭和十年以降も転勤せず土々呂小学校にとどまって高学年を受け持ったとしても、恐らく同じだったと思われる。木村寿の肉面的な真面目さから来るものだったからである。

『光』第十八号の「四月の行事」(「僕たちの学級」)には、靖国神社祭や天長節の日のことが出て来る。

四月二十七日 雨 靖国神社祭

今日は靖国神社の祭です。僕は東京はにぎやかいだらうと思ひました。僕は行つて見たいと思ひました。昨日先生が、あしたは靖国神社の祭です。戦争に行つて戦死した忠義な人が神様になられて祭られたのです。天皇陛下もおまわりにお出になる、とおつしやいました。

四月二十九日 雨 天長節

今日は天長節です。校長先生が、天皇陛下と皇后陛下のおしやしんをおひらきになりました。みんなおがみました。ちんおもふにもお

よみになりました。後でお話がありました。(略)一年生や二年生のさわぐのがあまりました。大きい方の生徒も少し話してあましたが、式の時は一生けんめいするがよいです。あとで、天長節のうたがありました。

天長節の日は日曜日で、大雨だったようである。「級日記」には「四月二十九日 日曜日 雨」とある。

「朝から雨がふつておりました。山にはきりがながれておりました。天長節ですから日曜でも学校にきました。かうどうで式がはじまつて、天皇陛下のおしやしんをおがんだり、君が代のうたをうたひました。今日はみんな新しい着物やふくを着ておりました。三年はまだ天長節のうたは知らないのです。十一時ごろかへりました。」(吉井己義)

式には生徒も新しい着物や服で出席したことなど、天長節の日の改まった雰囲気伝わってくる。

しかし日曜日だった上に大雨が降つたためもあって、欠席者が多かったようである。「四月のけつせき」には、この日のことが書かれている。

此の外、天長節の日にこなかつたものがおるので、先生がたいへんしかりました。上の級のものもいかん人がおつた、といつたら、先生が、そんな事はまねせんといしかりました。

此の日は大雨がふつて、——(略)——(筆者注 以下、六人ほどの欠席理由が書いてある。大水が原因で来られなかつた生徒もいる。)先生は、こんな大せつな日は、日曜日でも、どんな日でもこねはいかん。それにこないのは、ふとどけな生徒で、日本の子供でない。と、はげしくしかりました。

五月は、はらや、頭がいたくないやうにせねばいかんと思ひます。

(秋山栄次)

戦前の小学校でも、天長節の日にさぼる子どもはいたのである。式でも騒いだり話したりしている生徒もいる。それにしても、先生に叱られて、五月は病気しないようにしなければと反省する子どもも真面目さが、何となくユーモラスである。

天長節に対する態度に見られるように、木村寿は、当時としては「健全な」思想を持つ一般的な国民であり、靖国神社祭の話をしたり兵士への慰問文を書かせたりする真面目な教師であった。

しかし、かと言って、逆に、児童詩や綴り方においてそれを強要していたわけではない。今日から見れば、その真面目さが世相に沿った教育を子どもに施した面はあつたにせよ、木村寿の綴り方教育の根本は、あくまで「身近な子どもの生活」を良くすることにあつたのである。

補注

『綴方生活』第八巻第五号(昭和十一年六月一日)には、藤原幸孝の「遠足の題材を捉へるには……尋常六年生の子供達へ……」が掲載されている。藤原は函館市外の銭亀小学校六年生の担任である。

ここには「題材を捉へる大きな材料」として、「一、遠足の前
1、予告(朝会・昼会・教室で)の時 2、家へ帰って 二、遠足の日 1、出発の朝 2、出発 3、途中 4、目的地 5、帰り道 6、帰ってから 三、遠足の次の日 1、学校迄 2、朝会」が示されている。これは木村寿の遠足の綴り方構成とほぼ同じである。これが書かれたのは昭和十一年であるから、木村寿の実践の三年後のことである。木村寿の綴り方指導と直接関係があるのかどうかは分からないが、少なくとも木村寿の実践が先行していたことは事実である。

付記 本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第七部をなすものである。

(二〇〇五年四月三〇日 受理)